

# 職業行動に関する研究

## — SDS テストと進路発達について —

A Study of Vocational Behavior—on the relation between SDS's test and career development—

森 下 高 治

### 問 題

人は、それぞれの学校生活の時期に、すなわち、多くは中学校、或いは高等学校、また大学等の最終学年次に次への進路を定める決定的な場面を迎える。特に、年齢が増すに従って、みずからの意志のもとに上級学校への進学の方性や就こうとする職業分野を求めようとする。

Erikson (1968) は、思春期のなかで人間は自分のからだところ、そして自分のおかれてる歴史的、社会的環境との統合の中からアイデンティティ (Identity—自我同一性) の確立が重要であるという考え方を示している。ここで言う、アイデンティティとは「自分は何ものであるか。自分はどこに立ち、いかなる役割と目標に向って進むか。」である。

また、Super (1951, 1957) は、自己概念 (Self-Concept) の完成への努力が、青年の職業・進路選択にとって青年がかかえる最大の課題であるとしている。この自己概念は、「自分とは一体何かとの問いを基底に、自己の所有する能力、性格がどのようなものか。さらに、職業生活での自己の役割、就くべき仕事は何か。」との“自分というもの”の問題である。最終的には、自己概念の形成は、“職業世界での自分の確立”であると言える。

このようにみると、正しい自己理解の上にアイデンティティの確立、自己概念の完成、すなわち、自己自身、自分の確立がある。

しかし、現実にはこれらの確立をみずから遅らそうとする、或いは遅れる人たちがいる。これが、モラトリアム人間<sup>註1)</sup>という言葉であらわされている。前述の Erikson は、精神的社会的猶予期間 (psychosocial moratorium) としてモラトリアムという言葉を使ったが、変化の激しい難しい環境にある青年が、みずからの進路・職業問題で悩み、特に自己概念の現実化がはかれないところに、また、たとえ自己が確立できていても、自分のおかれてる時代と社会の中で、どういう形であらわして行けばよいかという青年たちがかかえる進路モラトリアムとい

註1) 小比木 (1974)。

う今日的課題がある。

次に、総務庁の調査から就職後の問題をとらえてみる。青年層には、例えば現在、コンピューターの操作の仕事・職業についていても、自分は果してあっているのか。或いは、念願のデザイナーの仕事に挑戦したいなど探索行動がよく起る。

15～19才の若年層のうち、過去1年以内に離職した割合は、1982年で14.9%を示し、1977年の5年前の9%に比べると増加の傾向にある。また、学校を卒業しても進学も就職もしない無業者<sup>註2)</sup>は、1983年において高等学校卒業生151.9万人のうち、8.2万人を数えていることも若年者の雇用問題、職業行動の観点から問題が大きい。

本研究の対象である高校生は、義務教育である中学校からの進学率が94%に達することから、高校を基点にその後30%の大学への進学率<sup>註3)</sup>に比べると、当該対象は中核にあたり、進路問題を考えるのに最も重要な時期である。

そこで本稿は、職業選択行動のただなかにある高校生を対象に、まず時間的経過を通した進路の発達状況を、卒業後の進路希望や上級学校への具体的方向性から、また志望職業の表明などから明らかにしようとする。

次に、仕事に対する活動性、能力の可能性と言った職業志向性を SDS 職業適性自己診断テストから捉え、これを進路発達状況との関連で検討することにする。

調査方法にある進路調査として、職業選択決定状況から特に現況の実態を問題にした。この職業選択決定状況は、Tiedman (1961) の職業選択過程の段階 (Vocational Decision—Making Process Stages) や下山氏 (1983) の進路決定地位の段階を参考に、10の項目<sup>註4)</sup>をあげ、それを大きくは既決群 (a、b、c)、中間群 (d)、未決積極群 (e、g)、未決消極群 (f、h) の4群とした。

また、職業的発達の問題を中西氏ら (1980) の進路発達調査にある進路成熟度尺度からも取り上げた。さらに、ホランド理論による SDS 職業適性自己診断テストを実施したが、これについては、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6領域の総合得点結果を問題にした。以下、順に方法の具体的問題について述べることにする。

## 方 法

対象は大阪府下にあるA公立高等学校（大学進学率男子約95%、女子80%で衛生都市に位置する。）普通科男子217名、女子228名、計445名と大阪市内のB公立高等学校（男子約75%、女

註2) 進学者、教育訓練機関等入学者、就職者及び死亡・不詳を除くもの。

註3) 昭和58年度 学校基本調査報告書。

註4) 決定状況の段階としては、a 達成、b 早期完了、c 希望、d 回避、e 探索、f 猶予、g 混乱、h 無関心の8段階で各々1項目、1段階である。項目は、これら以外にその他などが含まれる。

子60%の進学率で市内にある。) 普通科男子137名、女子186名、計323名である。

調査方法及び期日は、日文化 SDS 職業適性自己診断テスト (原著 Holland, J. L., 日本版著者 武田正信・森下高治) と添付の進路調査一中西 信男他著 実務教育 進路発達調査 CDT-3 を含む一を1984年2月の1年生時点と翌年の1985年2月の2年生時点に各校ともクラス毎、同一対象<sup>註1)</sup>に実施した。

## 結 果 と 考 察

### I 進路の時間的変化・実態について

#### 1 志望校の選択

Table 1、2 のように2群にわけ  $\chi^2$  検定を試みた。その結果、A、B両校、男女とも有意な変化 (男子 A  $\chi^2=62.41$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 女子 A  $\chi^2=39.80$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 男子 B  $\chi^2=13.78$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ , 女子 B  $\chi^2=19.12$ ,  $df=1$ ,  $p<.001$ ) がみられ、未定から明確に転じた生徒が1カ年の期間で男子A60.8%、B34.6%、女子A47.5%、B47.3%あり比較的高い割合を示した。ただ、男子Bの変化の割合はAより少ない。また、男女とも第1志望の学校、専攻の方向性に対する4つの選択肢は、反応なしの回答が多くみられ、この傾向は男子より女子が多く目立った。

#### 2 志望職業の選択

志望校と同様、Table 3、4 から  $\chi^2$  検定を試みた。その結果、男女ともA校はやや変化 (男子  $\chi^2=2.82$ ,  $df=1$ ,  $p<.1$ , 女子  $\chi^2=3.04$ ,  $df=1$ ,  $p<.1$ ) がみられた。具体的数値は、男子は未定から明確へ変化したのが、22.2%、女子は30.4%、逆に、明確から未定は男子26.4%、女子36.3%である。

一方、B校は男女とも変化 (男子  $\chi^2=5.92$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ , 女子  $\chi^2=6.35$ ,  $df=1$ ,  $p<.05$ ) がみられ、男子は未定から明確が27.0%、女子は28.0%、逆の明確から未定への変化は、男子30.6%、女子29.1%で志望校よりやや値は低いに変化の状況が生まれている。

Table 1-1 上級学校への具体的方向性  
(男子A)

| 今 | 回   | 明確  | 未定 | 計   |
|---|-----|-----|----|-----|
| 前 | 未 定 | 90  | 58 | 148 |
| 回 | 明 確 | 50  | 10 | 60  |
| 計 |     | 140 | 68 | 208 |

Table 1-2 上級学校への具体的方向性  
(女子A)

| 今 | 回   | 明確  | 未定 | 計   |
|---|-----|-----|----|-----|
| 前 | 未 定 | 66  | 73 | 139 |
| 回 | 明 確 | 36  | 10 | 46  |
| 計 |     | 102 | 83 | 185 |

註1) 対象は同一対象のみを取り上げたため、実調査対象数より、人数は減少している。また、本文の1部には、1984. 2 実施分の男子432名、女子469名のデータを用いた研究を掲載している。文中の対象の表示は、男子A、女子A、……として用いる場合がある。

職業行動に関する研究

Table 2-1 上級学校への具体的方向性  
(男子B)

| 今 | 回  | 明確 | 未定 | 計   |
|---|----|----|----|-----|
| 前 | 未定 | 27 | 51 | 78  |
| 回 | 明確 | 18 | 5  | 23  |
| 計 |    | 45 | 56 | 101 |

Table 2-2 上級学校への具体的方向性  
(女子B)

| 今 | 回  | 明確 | 未定 | 計  |
|---|----|----|----|----|
| 前 | 未定 | 35 | 39 | 74 |
| 回 | 明確 | 11 | 6  | 17 |
| 計 |    | 46 | 45 | 91 |

Table 3-1 志望職業に関する決定  
(男子A)

| 今 | 回  | 明確 | 未定  | 計   |
|---|----|----|-----|-----|
| 前 | 未定 | 32 | 112 | 144 |
| 回 | 明確 | 53 | 19  | 72  |
| 計 |    | 58 | 131 | 216 |

Table 3-2 志望職業に関する決定  
(女子A)

| 今 | 回  | 明確 | 未定  | 計   |
|---|----|----|-----|-----|
| 前 | 未定 | 45 | 103 | 148 |
| 回 | 明確 | 51 | 29  | 80  |
| 計 |    | 96 | 132 | 228 |

Table 4-1 志望職業に関する決定  
(男子B)

| 今 | 回  | 明確 | 未定 | 計   |
|---|----|----|----|-----|
| 前 | 未定 | 27 | 73 | 100 |
| 回 | 明確 | 25 | 11 | 36  |
| 計 |    | 52 | 98 | 136 |

Table 4-2 志望職業に関する決定  
(女子B)

| 今 | 回  | 明確 | 未定  | 計   |
|---|----|----|-----|-----|
| 前 | 未定 | 35 | 90  | 125 |
| 回 | 明確 | 39 | 16  | 55  |
| 計 |    | 74 | 106 | 180 |

### 3 具体的志望職業名の表明

A校の1年生時点の志望職業数は、男子が70名/217名中約30%、72件を数えた。B校は37名/137名中30%弱、43件である。これに対して、A校女子は83名/228名中約35%、101件、B校57名/186名中約30%、64件の表明である。

これが1カ年経過した時点でみると、A校男子は75名/217名中約35%、77件、B校は49名/137名中約35%、54件、また、A校女子は92名/228名中約40%、108件、B校は71名/186名中40%弱、78件の実態である。

以上から、上級学校への進路選択状況は、1年から2年にかけて明らかに明確化の方向に変化したものとみられる。しかし、志望職業は、具体的表明が30%から40%へとやや多くなる傾向にあるが、就きたい職業を決めているとの意識は、1年生時点明確であったものが、今回、逆に未定に転じ後戻りの現象を生じた。従って、就きたい職業の決定に関する意識は、全ての生徒が明確化の方向に進んだとは決して言えない。

### 4 職業選択決定状況について

男子では、Table 5-1、6-1の通り、選択決定状況の明確な既決群がA校79名、B校35名であった。そのうち、各々59名、24名が引き続き既決群に留まった。今回は、これにあらたに前回

未決積極群であった22名、11名が加わり、A校で94名、B校で50名が当該群の人数として数えられた。これに関連して、未決積極群は前回、A校は75名、B校が56名であったのに対して、今回の調査では、未決消極群と既決群からの後戻り分が入ったが、前述の通り一部が既決群に、それに消極群へ移ったため、結果的には各々64名、35名の人数に減じた。

一方、女子は Table 5-2、6-2 の通り、A校既決群が前回85名、B校45名であったのに対して、今回は104名、73名と大幅に当該群の人数が増加している。

また、男子に比し未決積極群のきわだった特徴として、積極群のうちの「混乱」の決定状況にあったものは、前回A校で55名みられたのに対して、今回は31名に、B校は56名であったのが、今回は31名と大きく減少しているのが目立つ。

以上、1カ年の変化は、全体的には早期完了、達成、希望の明確な既決群の方向へ選択決定状況が着実に進行していると言える。

Table 5-1 職業選択決定状況の推移 (男子A)

| 今 回 |           | 既 決 群 | 中 間 群 | 未決積極群 | 未決消極群 | そ の 他 |
|-----|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 前 回 | 既 決 群     | 79 59 | 6     | 8     | 3     | 3     |
|     | 中 間 群     | 5     | 26 7  | 7     | 6     | 1     |
|     | 未 決 積 極 群 | 22    | 9     | 75 32 | 11    | 1     |
|     | 未 決 消 極 群 | 5     | 4     | 16    | 32 7  | 0     |
|     | そ の 他     | 3     | 1     | 1     | 0     | 5 0   |
| 計   |           | 94    | 27    | 64    | 27    | 5     |

Table 5-2 職業選択決定状況の推移 (女子A)

| 今 回 |           | 既 決 群 | 中 間 群 | 未決積極群  | 未決消極群 | そ の 他 |
|-----|-----------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 前 回 | 既 決 群     | 85 61 | 6     | 11     | 3     | 4     |
|     | 中 間 群     | 8     | 25 8  | 7      | 1     | 1     |
|     | 未 決 積 極 群 | 28    | 13    | 100 50 | 6     | 3     |
|     | 未 決 消 極 群 | 4     | 2     | 3      | 13 4  | 0     |
|     | そ の 他     | 3     | 0     | 1      | 1     | 5 0   |
| 計   |           | 104   | 29    | 72     | 15    | 8     |

Table 6-1 職業選択決定状況の推移 (男子B)

| 今 回 |           | 既 決 群 | 中 間 群 | 未決積極群 | 未決消極群 | そ の 他 | 未 記 入 |
|-----|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 前 回 | 既 決 群     | 35 24 | 1     | 2     | 8     | 0     | 0     |
|     | 中 間 群     | 10    | 19 5  | 1     | 3     | 0     | 0     |
|     | 未 決 積 極 群 | 11    | 4     | 56 27 | 9     | 1     | 4     |
|     | 未 決 消 極 群 | 4     | 2     | 4     | 25 14 | 1     | 0     |
|     | そ の 他     | 1     | 0     | 1     | 0     | 2 0   | 0     |
| 計   |           | 50    | 12    | 35    | 34    | 2     | 4     |

職業行動に関する研究

Table 6-2 職業選択決定状況の推移

(女子B)

| 今 回    |           | 既 決 群 | 中 間 群 | 未決積極群 | 未決消極群 | そ の 他 | 未 記 入 |
|--------|-----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 前<br>回 | 既 決 群     | 45 33 | 3     | 5     | 2     | 1     | 1     |
|        | 中 間 群     | 15    | 26 4  | 4     | 2     | 0     | 1     |
|        | 未 決 積 極 群 | 23    | 11    | 97 53 | 9     | 0     | 1     |
|        | 未 決 消 極 群 | 1     | 3     | 5     | 15 6  | 0     | 0     |
|        | そ の 他     | 1     | 0     | 1     | 0     | 3 1   | 0     |
|        | 未 記 入     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0     | 0 0   |
| 計      |           | 73    | 21    | 68    | 19    | 2     | 3     |

## II 進路成熟度尺度を軸とした職業志向性、職業意識の変化

### 1 進路成熟度と職業選択決定状況の関係

個人の進路意識に関する発達度をみるため、進路に関する自発性、独立性及び計画性を含んだ、いわゆる進路成熟度尺度を実施したが、2を検討する前に、前述の職業選択決定状況との関連性を明らかにする。

ここでは、1984年2月のデーターを用い、両校あわせ1年生男子432名、女子469名の対象である。Table 7 に結果を示す。

成熟度の総合得点 (range 0~60) にみられる選択決定状況間の差異は、男女とも有意な ( $p < .01$ ) 結果が見いだされた。平均値の数値を取り上げても既決群から漸次未決消極群へ得点<sup>註1)</sup>が減少している。また、下位尺度も決定状況の段階が既決から未決へと段階が移行するほど得点が低くなっている。

特に、既決群と未決消極群は、下位尺度の自発性と計画性においても明確に区分されていることが明らかになった。

Table 7 職業選択決定状況にみられる進路成熟度尺度の平均値及び標準偏差

|       |      | 既 決 群<br>(a, b, c) | 中 間 群<br>(d) | 未決積極群<br>(e, g) | 未決消極群<br>(f, h) | F 値             |
|-------|------|--------------------|--------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| male  |      | N=138              | N=58         | N=164           | N=68            |                 |
| 自 発 性 | Mean | 11.50              | 9.96         | 9.17            | 7.64            | 22.60 $P < .01$ |
|       | SD   | 3.48               | 3.28         | 3.40            | 3.22            |                 |
| 独 立 性 | Mean | 16.69              | 15.96        | 15.80           | 15.27           | 6.73 $P < .01$  |
|       | SD   | 2.25               | 2.21         | 2.39            | 2.48            |                 |
| 計 画 性 | Mean | 11.13              | 8.86         | 7.48            | 7.25            | 41.68 $P < .01$ |
|       | SD   | 3.54               | 3.21         | 2.72            | 2.84            |                 |
| 成 熟 度 | Mean | 39.32              | 34.69        | 32.40           | 30.17           | 41.96 $P < .01$ |
|       | SD   | 7.11               | 6.59         | 5.84            | 6.15            |                 |

註1) 各尺度とも、得点の range は0~20である。

職業行動に関する研究

| female |            | N=143         | N=60          | N=221         | N=35          | F 値           |
|--------|------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------------|
| 自 発 性  | Mean<br>SD | 11.73<br>3.31 | 10.91<br>3.63 | 10.03<br>3.12 | 7.22<br>2.95  | 20.71 $P<.01$ |
| 独 立 性  | Mean<br>SD | 16.18<br>2.29 | 15.68<br>2.06 | 15.13<br>2.43 | 14.77<br>2.58 | 7.09 $P<.01$  |
| 計 画 性  | Mean<br>SD | 11.76<br>3.81 | 8.66<br>3.06  | 7.50<br>2.44  | 7.40<br>2.60  | 61.91 $P<.01$ |
| 成 熟 度  | Mean<br>SD | 39.68<br>7.33 | 35.10<br>6.36 | 32.67<br>5.53 | 29.40<br>5.68 | 46.06 $P<.01$ |

## 2 進路成熟度からみた職業志向性 (SDS 結果) の変化

進路成熟度の総合得点が、前回 (1984. 2) よりプラス 8 点以上、上昇した A 校男子を取り出し、彼らの SDS 総合結果に変化が見いだせるかを検討した。具体的方法は、対象が 34 名の同一対象であるため、相関する 2 つの平均の有意差検定 (t 検定) を行った。

Table 8 から、研究的 ( $t=2.60$ ,  $df=33$ ,  $p<.05$ )、社会的 ( $t=2.70$ ,  $df=33$ ,  $p<.05$ ) 及び企業的 ( $t=2.52$ ,  $df=33$ ,  $p<.05$ ) の 3 領域に変化があり、いずれも 1 カ年経過した今回の方が有意に得点が高く認められた。

これを志望職業の別な視点からみると、前回 11 名のものが具体的職業をあげたのに対して、今回はあらたに教員 2 名、技師 2 名、その他 2 名の計 6 名が志望職業を表明した。しかし、前回あげた 2 名は今回は表明しなかったため、マイナス分を除くと計 15 名の表明である。全体的な傾向としては、志望校がより具体化し、職業選択 決定状況もより 上位の段階に移行している。

Table 8 進路成熟度尺度を軸とした SDS 総合結果について

| 領 域           |            | 今回(85.2)<br>N=34 | 前回(84.2)<br>N=34 | 相関係数      | t 値              |
|---------------|------------|------------------|------------------|-----------|------------------|
| Realistic     | Mean<br>SD | 23.41<br>9.84    | 22.79<br>11.08   | $r=0.883$ | $t=0.68$         |
| Investigative | Mean<br>SD | 24.61<br>9.02    | 21.02<br>7.86    | $r=0.564$ | $t=2.60$ $p<.05$ |
| Artistic      | Mean<br>SD | 21.23<br>8.97    | 18.70<br>7.83    | $r=0.628$ | $t=1.99$         |
| Social        | Mean<br>SD | 25.17<br>10.20   | 22.17<br>8.88    | $r=0.785$ | $t=2.70$ $p<.05$ |
| Enterprise    | Mean<br>SD | 20.44<br>9.98    | 17.52<br>7.79    | $r=0.743$ | $t=2.52$ $p<.05$ |
| Conventional  | Mean<br>SD | 15.85<br>8.59    | 14.50<br>6.04    | $r=0.424$ | $t=0.95$         |

### Ⅲ 進路発達状況と SDS の関係

#### 1 進路既決群と未決群にみる SDS プロフィール結果

上級学校への具体性が明確で且つ職業への決定状況が既に決定の方向にあるものと上級学校への方向性が不明確で、職業選択状況も未決のもの2群を、1984年2月の男女別に両校合わせたデーターから抽出した。

Table 9、10、Fig. 1 から明らかなように両群は明確にわかれたプロフィールを描く。6領域のうち、男子は芸術的 ( $t=2.70$ ,  $df=109$ ,  $p<.01$ )、社会的 ( $t=3.24$ ,  $df=109$ ,  $p<.01$ ) 及び企業的 ( $t=2.20$ ,  $df=109$ ,  $p<.01$ ) の3領域が、女子も慣習的を除く5領域が現実的から企業的の順に ( $t=2.16$ ,  $p<.05$ ,  $t=2.88$ ,  $p<.01$ ,  $t=3.18$ ,  $p<.01$ ,  $t=2.52$ ,  $p<.05$ ,  $t=3.10$ ,  $p<.01$ , いずれも  $df=73$ ) 有意で、既決群に得点が高い。また、既に明らかになったが、ここでも両群の進路成熟度得点を比較したところ、Table 11、12 の通り既決群に得点が高くみられた。

これから、将来の職業の方向性や上級学校への進学が不明確なものは、明確且つ既に定まっている既決群よりも仕事の活動性や能力などの職業志向性は弱いと言える。

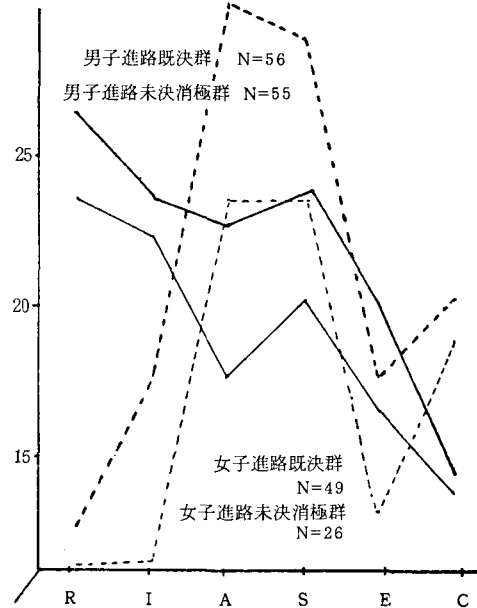


Fig.1 進路既決群、未決消極群の SDS 総合プロフィール結果

Table 9 進路既決群と未決消極群の SDS 総合結果

(男子)

| 領域            | Mean<br>SD | 進路既決群<br>N=56  | 進路未決消極群<br>N=55 | t 値              |
|---------------|------------|----------------|-----------------|------------------|
| Realistic     | Mean<br>SD | 26.48<br>11.30 | 24.54<br>10.14  | $t=0.94$         |
| Investigative | Mean<br>SD | 24.64<br>10.28 | 22.01<br>8.19   | $t=1.48$         |
| Artistic      | Mean<br>SD | 22.75<br>9.96  | 17.65<br>9.75   | $t=2.70$ $p<.01$ |
| Social        | Mean<br>SD | 24.91<br>7.56  | 20.38<br>7.01   | $t=3.24$ $p<.01$ |
| Enterprise    | Mean<br>SD | 20.53<br>9.46  | 16.81<br>8.14   | $t=2.20$ $p<.05$ |
| Conventional  | Mean<br>SD | 14.58<br>7.30  | 13.81<br>7.47   | $t=0.55$         |



職業行動に関する研究

Table 10 進路既決群と未決消極群の SDS 総合結果

(女子)

| 領域            |            | 進路既決群<br>N=49 | 進路未決消極群<br>N=26 | t 値          |
|---------------|------------|---------------|-----------------|--------------|
| Realistic     | Mean<br>SD | 12.71<br>6.74 | 9.53<br>4.13    | t=2.16 p<.05 |
| Investigative | Mean<br>SD | 17.63<br>9.55 | 11.69<br>5.44   | t=2.88 p<.01 |
| Artistic      | Mean<br>SD | 30.91<br>8.71 | 24.30<br>7.91   | t=3.18 p<.01 |
| Social        | Mean<br>SD | 28.38<br>7.44 | 24.30<br>4.50   | t=2.52 p<.05 |
| Enterprise    | Mean<br>SD | 17.63<br>6.47 | 13.07<br>4.86   | t=3.10 p<.01 |
| Conventional  | Mean<br>SD | 20.22<br>6.57 | 18.80<br>8.64   | t=0.78       |

Table 11 進路既決群と未決消極群の進路成熟度結果

(男子)

| 進路成熟度尺度 |            | 進路既決群<br>N=56 | 進路未決消極群<br>N=55 | t 値           |
|---------|------------|---------------|-----------------|---------------|
| 自発性     | Mean<br>SD | 12.50<br>3.10 | 7.69<br>3.24    | t=7.89 p<.001 |
| 独立性     | Mean<br>SD | 17.01<br>2.12 | 15.29<br>2.39   | t=4.00 p<.001 |
| 計画性     | Mean<br>SD | 12.62<br>3.57 | 7.03<br>2.96    | t=8.87 p<.001 |
| 成熟度     | Mean<br>SD | 42.14<br>6.43 | 30.01<br>6.50   | t=9.78 p<.001 |

Table 12 進路既決群と未決消極群の進路成熟度結果

(女子)

| 進路成熟度尺度 |            | 進路既決群<br>N=49 | 進路未決消極群<br>N=26 | t 値           |
|---------|------------|---------------|-----------------|---------------|
| 自発性     | Mean<br>SD | 12.57<br>2.69 | 7.26<br>2.87    | t=7.81 p<.001 |
| 独立性     | Mean<br>SD | 16.69<br>2.10 | 14.80<br>2.56   | t=3.38 p<.01  |
| 計画性     | Mean<br>SD | 13.44<br>3.52 | 7.50<br>2.83    | t=7.33 p<.001 |
| 成熟度     | Mean<br>SD | 42.71<br>5.99 | 29.57<br>5.58   | t=7.60 p<.001 |

Table 13 志望職業別 SDS 総合結果と進路成熟度結果について

| 領 域           |      | ①研究者<br>N=13 | ②技 師<br>N=26 | ③教 員<br>N=13 | ④営 業・<br>事業経営<br>N=11 | ⑤職業未定群<br>N=297 | ⑥教 員<br>N=20 | ⑦幼稚園・<br>保 母<br>N=17 | ⑧看護婦<br>N=10 | ⑨事 務<br>N=19 | ⑩職業未定群<br>N=313 |
|---------------|------|--------------|--------------|--------------|-----------------------|-----------------|--------------|----------------------|--------------|--------------|-----------------|
| Realistic     | Mean | 29.00        | 34.65        | 22.69        | 22.72                 | 25.11           | 13.15        | 9.58                 | 11.80        | 11.00        | 11.79           |
|               | SD   | 8.09         | 5.65         | 10.75        | 12.33                 | 9.32            | 6.14         | 4.92                 | 4.75         | 5.18         | 6.09            |
| Investigative | Mean | 37.61        | 28.92        | 18.76        | 22.18                 | 20.61           | 17.15        | 10.00                | 14.80        | 12.52        | 13.16           |
|               | SD   | 4.08         | 8.44         | 7.25         | 8.65                  | 8.90            | 7.47         | 3.56                 | 6.37         | 5.95         | 7.09            |
| Artistic      | Mean | 16.23        | 18.84        | 26.46        | 18.27                 | 18.00           | 30.20        | 26.11                | 24.10        | 23.57        | 26.56           |
|               | SD   | 11.10        | 9.18         | 7.89         | 8.67                  | 9.04            | 10.75        | 7.35                 | 8.22         | 7.31         | 8.98            |
| Social        | Mean | 21.30        | 21.19        | 31.30        | 26.27                 | 21.53           | 33.45        | 30.70                | 29.30        | 23.36        | 25.56           |
|               | SD   | 7.36         | 7.03         | 7.61         | 6.24                  | 7.31            | 6.73         | 5.72                 | 5.95         | 6.88         | 6.61            |
| Enterprise    | Mean | 14.76        | 14.96        | 20.23        | 28.00                 | 17.37           | 20.20        | 16.17                | 16.40        | 13.94        | 14.99           |
|               | SD   | 7.83         | 10.14        | 6.37         | 9.70                  | 7.79            | 7.13         | 6.47                 | 4.96         | 8.31         | 6.84            |
| Conventional  | Mean | 16.00        | 14.96        | 12.61        | 16.00                 | 13.92           | 22.80        | 20.70                | 15.90        | 22.63        | 18.96           |
|               | SD   | 8.98         | 5.28         | 5.89         | 5.75                  | 6.97            | 7.02         | 6.47                 | 5.36         | 8.11         | 7.01            |
| 進路成熟度         | Mean | 44.38        | 38.84        | 39.61        | 42.27                 | 32.51           | 41.30        | 36.17                | 38.20        | 31.58        | 33.29           |
|               | SD   | 5.79         | 7.82         | 6.08         | 6.34                  | 6.11            | 5.81         | 7.73                 | 6.69         | 4.75         | 6.35            |

①～⑤は男子の志望職業群，⑥～⑩は女子の志望職業群を示す。

## 2 志望職業にみられる SDS 結果と進路発達の状況

1 の処理と同じデータから幾つかの志望職業群を取り出し、志望職業による SDS 結果を検討した。Table 13 から男女とも各群は特徴のあるプロフィールを描いている。

例えば、研究者群は 6 領域のなかで研究的領域が高く、次に現実的領域がつづいている。また、技師群は現実的領域が、営業・事業経営群は企業的領域が高い。これに対して、女子の教員群は、社会的領域と芸術的領域が高く、この傾向は看護婦群や幼稚園教員・保育群にも言える。事務職群は、芸術的、社会的領域とならび慣習的領域が高い。

一方、職業別の成熟度の総合得点は、男子の未決群が32.5に対して、研究者群が44.4で最も高く、教員群は39.6、逆に、低い職業群は事務職群の35.1である。

女子は、未定群が33.3であるが、教員群が41.3で高い。看護婦群は38.2、事務職群は31.6である。これから、男女を通じて成熟得点が高ければ、職業の具体化、明確化がほぼ図られていると言える。また、大学への進学希望や将来の職業と結びつけた専攻の決定は、専門的職業の志望者群が明確で且つ高い割合を示す。

本研究は、わずか 1 カ年間の時間的変化を中心に論文をまとめたが、今後、さらにもう 1 年の積み上げ、そして卒業以降の彼らの具体的進路を追っていく予定である。これにより、青年の職業選択行動、その後の適応行動の一側面を明らかにすることができるものと思われる。

## appendix

### 進路に関する調査\*

昨年に引き続いて、現時点での皆さんの進路についてのお考えをお尋ね致します。調査票は前回とはほぼ同じですが、日頃思っている将来のことなど、指示に従って誤りのないよう記入してください。

進路決定に関して、現在のあなたの状態に最もよくあてはまるものを、各設問ごと 1 つだけ選び、その記号を○印でかこんでください。

また、記述が必要なところは、\_\_\_\_\_のらんに書いてください。

#### 1. 高校卒業後の進路について

- a 大学進学
- b 短期大学進学
- c 専門学校進学
- d 就職（家業も含む）し、進学する。
- e 就職（家業も含む）
- f 家庭でおけいごとや家事をする。
- g どうするか決めていない。
- h その他（\_\_\_\_\_）

※ 本票は、1985. 2 実施分の一部である。前回と 1 部、項目を差し換えている。また、進路発達調査 CDT-3 は除く。

### 進学者のみ記入

#### 2. 第1志望の学校、学部・専門の方向性について

- a 明確にきめている。
  - b 大体きめている。
  - c ばくぜんとしている。
  - d まだ、何も考えていない。
- } 質問3、4に進んでください。
- } 質問4に進んでください。

#### 3. 志望校、専攻を④明確にきめている ⑤大体きめていると答えた方のみ記入

##### 3-1 志望校、専攻について

- a 志望校と専攻の両方を決めている。
- b 志望校のみ決めている。
- c 専攻のみ決めている。

志望校名

学部・科(専攻・コース)名

志望理由

##### 3-2 その場合、将来の職業と結びつけて志望校、専攻を決めましたか。

- a 十分考えて決定した。
- b 多少考えて決定した。
- c 全く考えずに決定した。

##### 3-3 決定の時期について

\_\_\_\_\_年生 \_\_\_\_\_才の時に決定

#### 4. あなたはなぜ進学しますか。重要なことから順に3つ必ず選び出して下さい。

最も重要 \_\_\_\_\_ 次に重要 \_\_\_\_\_ 重要 \_\_\_\_\_

- a 教養や視野を拡大するため
- b 学生生活や課外活動を楽しむため
- c 専門知識や技術を修得するため
- d 資格を取得するため
- e このまま会社に出るのは不安だから
- f 就職に必要な勉強をするため
- g 学歴がないと将来困りそうだから
- h 就職に有利だから
- i 学問研究がしたいから
- j 立派な人格形成をはかるため
- k 家族や先生がすすめるから
- l 皆が行くから
- m その他 ( \_\_\_\_\_ )

### 全 員 記 入

5. 志望職業について、高校または上級学校卒業後の就きたい職業・仕事をあげてください。会社員や公務員などは、そこでのやりたい仕事内容——例えば、営業係、経理係、一般事務、窓口係のように——をくわしく書いてください。

a 明確にきめている

志望職業名

b 大体きめている

記入が終わったら質問6に進んでください。

c ばくぜんとしている

d まだ、何も考えていない。

質問7に進んでください。

e 職業・仕事には就かない。

6. 志望職業を①明確にきめている ②大体きめると答えた方のみ記入

6-1 その職業・仕事を選んだ一番の理由を1つあげ、○印でかこんでください。

a 給料がよいから

b 親や家族がしているから

c 興味があり、自分にあっているから

d 社会的に価値ある職業だから

e 将来性のある職業だから

f 先生、友だち、家族などがすすめたから

g 安定した職業であるから

h ただなんとなく

i その他 ( )

6-2 志望職業の決定時期について

\_\_\_\_\_年 生 \_\_\_\_\_才頃に決定

### 全 員 記 入

7. 次に、職業の選択決定に関することがらがあげてあります。このうち、今のあなたの状態に一番近いものを1つ選び、○印でかこんでください。a～iにあてはまらない場合、j その他を選び、今の状態をくわしく書いてください。

a 将来を真剣に考え、積極的に志望する職業の決定をはかっている。

b なんの難しさも殆どなく、迷わず志望する職業をきめている。

c 就きたい希望の職業があり、なるべく実現できたらと思っている。

d 取敢えず志望の職業はあげているが、いざ就職時にもう一度考えるつもりである。

e いずれの職業・仕事に向いているか、出来るだけ早い時期に見つけだそうとしている。

f 今は決めていなく、上級学校へ入ってから考えるつもりである。

g 将来、何をすればよいかを迷っている状態である。

h 将来については考えないで、なんとかなればと思っている。

i 職業・仕事には就かないので、この設問には答えられない。

j その他 ( )

8. これからの進路について、この1年間で例えば親との間に、また自分自身のなかで何か変化がありましたか。

(例：将来デザイナーになろうと決心した。あるいは、今まで自分と親の意見は食い違っていたが、自分の希望する進路に理解を示すようになった。etc.)

a 変化があった。

b 変化がなかった。

## 文 献

- Erikson, E. H. 1968 Identity, Youth and Crisis. Norton.
- Holland, J. L. 1973 Making Vocational Choices: a theory of careers. Prentice-Hall.
- Holland, J. L. 1985 Making Vocational Choices: a theory of vocational personalities & work environments. 2nd. ed. Prentice-Hall.
- 神谷美恵子 1974 ころの旅 日本評論社。
- 文 部 省 1984 昭和58年度学校基本調査報告書（初等中等教育機関 専修学校・各種学校）（高等教育機関）大蔵省印刷局。
- 森下高治 1983 職業行動の心理学 ナカニシヤ出版。
- 森下高治 1984 職業行動に関する研究——SDS テストと進路発達について 日本心理学会 第48回 大会発表論文集。
- 森下高治 1985 職業行動に関する研究——SDS テストと進路発達について② 日本心理学会 第49回 大会発表論文集。
- 中西信男・竹内登規夫・那須光章 1980 進路発達調査 CDT-3 実務教育出版。
- 小比木啓吾 1974 モラトリアム人間の時代 現代のエスプリーアイデンティティ 至文堂。
- 下山時彦 1983 高校生の人格発達状況と進路決定との関連性についての一研究 教育心理学研究 Vol. 31 -2、157-162.
- 総理府青少年対策本部 1984 青少年白書 昭和58年版 大蔵省印刷局。
- Super, D. E. 1951 Vocational adjustment: implementing a self-concept. Occupation 30, 88-92.
- Super, D. E. 1957 The Psychology of Careers. Harper and Brothers. (日本職業指導学会訳 1967 職業生活の心理学 誠信書房)。
- Super, D. E. & Bachrach, P. B. 1957 Scientific Careers and Vocational Development Theory. Columbia Univ.
- 武田正信・森下高治 1981 SDS 職業適性自己診断テスト 日本文化科学社。
- Tiedeman, D. V. 1961 Decision and vocational development: a paradigm and implication. Personnel and Guidance Journal 40, 15-21.